

私の時代

キューピットの 住み処

阿木燿子
(本名:木村広子、S43年卒/GH)

古き良き時代、といったらあまりに年寄り臭いだろうか。私が明治大学に通っていたのは、二九六十年代の中頃。まだまだ学生運動が盛りの頃だ。若者が若者らしかった時代と呼んでも良いだろう。もともと私はノンポリで、その手の集会に出席したことはないし、デモに参加したこともない。おまけに授業にもあまり出なかった。では何をしていたのかというところばら部活に精を出していたのである。私が所属していたのは、軽音楽クラブの女子ハイアン。私はそこでスチールギターを担当していた。

平成10年(1998年) 5月15日発行

もともと音楽に興味があった訳ではない。子供の頃、ピアノを習っていたとか、声楽を学んでいたとか、そういうこともなく成長して、音楽といえはラジオやテレビから流れてくるものを一方的に聴いていただけだ。それが何故、軽音楽クラブに入ったかという点、新人生勧誘の網の目に引かされたのである。私に声をかけてきたのはバンカラな校風には珍しく、オシャレな感じの二人組の男子生徒だった。両方とも、アイビーで決めていた。それまでFungiに入ろうか、何

か軽いスポーツの同好会にしようか、などと考えていたのに、彼らの誘いについて乗ってしまった。だって、二人とも格好良かったのだから。

時々母に、お前を文学部ではなく、軽音楽部に入れたよいうなものだ、と嫌味を言われるくらい、それから四年間は部活に筋だった。自分でも呆れるくらい練習もしたし、頑張りました。

ブレイの方は、ちっとも上手くならなかったが、そこで学んだことは、計り知れない。軽音楽クラブ自体が小さくても組織だったから、ずいぶんと社会勉強させて貰ったように思う。そして、何よりも私の人生を

決定する出逢いがあったことを考えれば、入部したことに運命的なものさえ感じる。そう、私を勧誘した、格好良い二人組の一人は主人。
あの時の彼の爽やかな笑顔に好感を持ったのが、今こうして私が屏ることのすべての元になっっている。私にとって軽音楽クラブは、キューピットの住み処なのだ。

阿木燿子

作詞家。横浜市出身。

宇崎竜彦と結婚後、彼が率いるバンド「ダウン・タウン・ブギウギ・バンド」のために書いた曲、「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」で作詞家としてデビュー。その後、山口百恵の曲を宇崎と共に、作詞作曲し、昭和51年には「横須賀ストーリー」で日本レコード大賞作詞賞を受賞。また54年には「魅せられて」で日本レコード大賞を受賞。他に「DESIRE-情熱」や「はがゆい恋」などのヒット曲あり。

近年は小説やエッセイも手懸け、著作にエッセイ集「まあ一くる生きて」「花なら桜」小説集に「指輪の重さ」(刺のあるスーツ)「赤い靴伝説-横浜物語」など。

「あのとき君は 若かった」

萩原 昭(S41年卒/W)



CDライブ演奏会 23回
同窓会アトラクション 2回
地方演奏会 15回
ダンスパーティー 7回
軽音楽クラブ定期演奏会 2回
ラジオ出演 2回

その他、和泉祭・駿台祭・葉山でのキャンパスツアー出演
これは、古い書類箱から出てきた昭和40年の手帳からひろったカントリー・ケーパリスの活動状況です(1・2・10月は欠落のため不明)。この年は4年生でこのハードなスケジュールの間に、単位を落とさずそう

な科目の追試を受けたり、演奏旅行の途中で帰郷し就職試験を受けるなど50数年の人生で二番充実した時のような気がする。

この頃のkantree・ケーパリスは大学対抗バンド合戦で特別賞を受けた。たけ中(司会)・ベリスをバハマスに、プロで通用する名ドラマー久ト(S42年卒)、早弾きを得意とする北島(E.G.S42年卒)そしてまた学生バンドでは演奏者が少なかったペダル・スチールギターの藤原で固めたバックバンドと、独特のバフ・オ・マンスで聴衆を魅了したホル・カル陣ハ小池(S41年卒・故人)、小嶋(S42年卒)、岩田(S43年卒)、村田(S43年卒)をメンバーとする学生バンドN.O.1の実力と自分達で勝手に思いこみ、コンサート、ダンスパーティーをこなし、ときにはフロバンドのトラにも行くという生活を送っていた。

このように日本の音楽界にkantree・ウエスタン音楽の普及に役買ったkantree・ケーパリスは、その後数年間学生音楽界のトップに座し、今日のCD音楽を支える多く